

多聞天になったチンギス・ハーン —内モンゴル自治区アルジャイ石窟内の神々—

楊海英(静岡大学)

一 はじめに

北・内陸アジアの遊牧民諸集団はその王権の基盤をシャマニズム的宇宙観に置いてきたことは従来から指摘されている(松原 1991:415-441)。匈奴や突厥の汗^{ハーン}たちの即位式が例外なくシャマニズムの儀式にのっとって挙行されていたことが、漢文資料に残っている。モンゴルの場合も同様に、チンギス・ハーンという称号がシャマンによって授与されていることを13世紀に書かれた『モンゴル秘史』は伝えている。エリアーデの言葉を借りれば、北方のシャマニズム社会において「部族長はまたその部族儀礼の司祭である」ことがひとつの特徴とされている(エリアーデ 2004(1974):42)。

しかし、その後、モンゴルの政治世界において大きな変化が訪れる。チンギス・ハーンによるシャマン殺害である。少なくともシャマンの力を借りて大ハーンに任命された人物がそのシャマンを抹殺することを演じることによって、チンギス・ハーンは名実とも大ハーンとシャマンの両方を一身に集めることができたといえよう。そのような彼とその後継者たちはユーラシア世界を跨ぐ大帝国を創りあげ、そのうち帝国の東方を成す元朝はのちにチベット仏教を国教とするようになった。

仏教がチベット高原からモンゴル草原へ広まっていく中で、数多くの土地の神々を自らのパンテオンに迎え入れた。元朝の場合だと、草原の有力者たちの祖先や地元古来の神々もまた仏教界の神々に列するようになった、と指摘されている(Heissig 2000(1969):1-2)。例えば13世紀の元朝宮廷ではフビライ・ハーン(1215—1294)が転輪聖王になり、チベット人のパクパを国師として崇める政治を敷いた。ここから「政治と宗教」という二規理論が正式に登場する。

元朝の中原からの撤退に伴い、いったんはモンゴルとチベット仏教との関係は薄れるが、16世紀後半にアルタン・ハン(1507—1582)が再び仏教を導入した際、自らをいにしえのフビライ・ハーンの転生とし、再度転輪聖王を称するようになる。そして、仏教側の高僧にはダライ・ラマ(「海の如き広い知識をもつ僧」との意)という称号を与え、「王と法王」の関係が再度確立される。元朝によって創られたこのような「王と法王」の関係は17世紀に成立された満洲清朝にも継承され、20世紀初頭までつづくことになる。例えば、乾隆皇帝は自らを文殊菩薩の化身と位置づけ、チベット仏教の保護者として振舞った。いうまでもなく、元朝と清朝がこのように自らをチベットひいてはインドの神聖な宗教と結びつけたのは、中華世界を統治するときに異なる論理を示す必要があったからであろう。つづいて、そのような統治論理を映像として具体的に表象していた例を紹介しよう。内モンゴル自治区西部にある仏教遺跡、アルジャイ石窟にその実例がある。

二 チンギス・ハーンと仏教石窟

『モンゴル秘史』によると、チンギス・ハーンは 1225 年に西夏征服に着手し、その年の冬に黄河南岸のアルプス山中(現在のオルドス高原の西北部)に駐営したとある。巻狩の途中に落馬し、「多数の洞窟」内に入って療養したとも伝えている。この「多数の洞窟」は今日、内蒙古自治区西部オルドス高原西北部にあるアルジャイ石窟(写真 1)であることが特定されている。当時、「多数の洞窟」は西夏王国の石窟寺院であった(楊 2004)。西夏が滅亡する時、その国王は仏像を持参して帰順したとの記録もあるが、恐らくこれがチンギス・ハーンと仏教との最初の出会であろうが、後世のモンゴル語年代記はそれ以前だとしている。

アルジャイ石窟は 2003 年 3 月に中国の重点文物に認定された。このアルジャイ石窟の第 31 号窟内に、モンゴル帝国の創設者チンギス・ハーンは仏教の神、多聞天として描かれている(写真 2)。

周知の通り、多聞天は元々ヒンドゥー教における財宝の神クペーラの別名である。仏教神話では須弥山の第四層にて北方を守る善神とされている。チベット仏教でも同様な見方がある。多聞天は普通白い獅子の上に座し、右手に宝傘、左手には財宝を運ぶ宝鼠を持つイメージで描かれる。一般的なチベット仏教の仏画はそのイメージを忠実に再現している(図 1)。

当然ながら、アルジャイ石窟内の多聞天も仏画の伝統から逸脱はしていない。多聞天の周囲には馬に乗った八人の夜叉と羅刹があり、その下には元朝時代の服装を纏った人々が高僧の説教に耳を傾けているシーンが展開されている。フビライ・ハーンとその一族が国師パクパの話を聞く場面とされている。いわば、四天王のひとり多聞天が元帝室を加護する形となっている。

しかし、一般のモンゴル人たちやモンゴル人僧侶たちは別の見方をする。彼らは多聞天をナムサライ(Namsarai)と呼ぶ。ナムサライはほかでもないチンギス・ハーンが長逝後になった神様だと信じられている。モンゴル人から見れば、壁画はチンギス・ハーンがその直系子孫たちを天上から見守る構図となっている。当然、その子孫たちは「政治と宗教」の二規理論に基づいて治世にあたっていなければならない。

では、なぜモンゴル人たちがチンギス・ハーンと多聞天とを同一視するようになったのであろうか。この問題を考えるヒントはかの元朝の国師パクパの著作『彰所知論』にあるように思われる。『彰所知論』は早くも元朝時代に漢訳され、大蔵經に編入されている。それには次のような表現がある(石濱 2001:39)。

……仏が涅槃に入ってから三二五〇年以上経過した時、北方のモンゴル国に功德を積んだ果が熟し、チンギス＝ハンという者が現れた。その方は北方から始まってさまざまな言語の国を多数征服して、力によって輪を転ずる者のごときになったのである。

このように、北方から生まれたチンギス・ハーンを「輪を転ずる者」と結びつけたのは、国師バクパの創見であったことが記されている。このような「公式見解」が民間にも広がっていった可能性も否定できないだろう。

チンギス・ハーンは死後に神聖視され、元朝の祖先祭祀の施設である太廟内で祀られていたことは『元史』「祭祀」項に明確な記録がある。元朝以降には独自の祭殿(写真 3)と祭祀活動が今日まで維持されてきた。歴世のハーンたちもその祭殿内で即位するか即位後に参拝する形で、チンギス・ハーンによる承認を得ようとのパフォーマンスを演じてきた(楊 2004)。チンギス・ハーン祭殿とその祭祀は少なくとも建前上は仏教的な要素を導入しようとはせずに、ひたすらシャマニズムの伝統を頑なに守ってきたのである。

三 仏教と融合していた軍神と国旗

モンゴル人が戦いの時にスウルデ (Sülde) という軍神を携えていたことは『モンゴル秘史』をはじめ、数多くの年代記に記録がある。その軍神スウルデ(写真 4)には人間を生贄として捧げていたことが古文書や口頭伝承によって裏付けられている。軍神スウルデの祭祀もやはりシャマニズムのしきたりにしたがっておこなわれてきた。長い歴史を経た現在、軍神スウルデの祭祀はチンギス・ハーンの祭殿と結合した形で維持されている。軍神スウルデもチンギス・ハーンの祭殿とともに内蒙古自治区のオルドス地域にある(楊 2004)。

ところが、軍神スウルデは一時、元朝時代に大黒天(マーハーカーラ)と重なっていたことがある。元朝のモンゴル軍が戦争の勝利を祈願して大黒天を祭っていたという記録は『元史』「釈老伝」などにある。北・内陸アジアの盟主がモンゴルから満洲人に交代していくなかで、モンゴル最後のハーンが携えていた大黒天の仏像を後金国が入手し、瀋陽で祭るようになった。この例からも分かるように、満洲清朝はかつての元朝のあらゆる権威を受け継ごう、と努力していたようである。

20世紀初頭、ドイツの探検隊は新疆にあるトルファン遺跡から多数の古文書を見つけた。その中には元朝時代にモンゴル語に訳されたマーハーカーラ賛歌が含まれている(Cerensodnom and Taube 1993:114-120)。このマーハーカーラ賛歌は軍神スウルデの祭詞とほぼ一致する内容で、同じ語句も多数ある。

軍神のほか、モンゴルにはまた国旗の祭祀が古くから存在してきた。国旗をモンゴル人は「白いスウルデ」と呼ぶ(楊 2004)。この国旗たる白いスウルデも一時仏教の神と結合していた形跡がある。モンゴル人民共和国とソ連の調査隊がモンゴル高原西部の仏塔址から17世紀前半に白樺に書かれた文書を発見したのは1970年のことである。そのうちのヤマンタカ(大威徳金剛)の賛歌は、白いスウルデの祭詞とほぼ同様であることが報告されている(Chiodo 2000:140-147)。

このように、シャマニズムの伝統のもとに生まれた軍神と国旗の両方が歴史のなかで仏教の神々と重なっていたことが明らかである。

四 終わりに

以上、私は主として近年内蒙古自治区で新しく発見された石窟内の壁画の紹介を中心に、軍神と帝国の国旗の事例も交えながら、遊牧民として中華世界を統治していたモンゴル人たちが如何なる権力像を描いてきたかを実例で以て説明した。

北・内陸アジアの遊牧民諸社会の権力は 13 世紀以降、ほとんど例外なくチンギス・ハーン家の威光を借りるようになった。モンゴルのみならず、カザフ族などトルコ系の諸集団内においても、チンギス・ハーン家と血縁上つながりを持つ者のみが権力の座についてきた。いわゆる仏教文化圏内ではチンギス・ハーンが仏教の神に変身したり、仏教の神々がモンゴルの守護神になったりした。イスラーム文化圏内では、チンギス・ハーン家の出身者と預言者一族との関連を結びつけようという試みも歴史上にはあった。今後、北・内陸アジアにおいて、これらの言説が権力と統治機構に如何なる影響を与え、どのように表象されていたかを逐一解明していくことが課題である。

参考文献

Cerensodnom and Taube

1993 *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung*. Berlin.

Chiodo, E.

2000 *The Mongolian Manuscripts on Birch Bark from Xarboxyn Balgas in the Collection of the Mongolian Academy of Sciences*. Wiesbaden.

Heissig, W

2000(1969) *Religion of Mongolia*. London and New York.

エリアーデ・ミルチア

2004 『シャマニズム—古代的エクスタシー技師』上(初版 1974) 筑摩書房。

石濱裕美子

2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。

松原正毅

1991 「遊牧社会における王権」松原正毅編『王権の位相』pp415-441, 弘文堂。

楊海英

2004 『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成』 風響社。

2004 「チンギス・ハーンの遺産—中国・アルジャイ石窟」『讀賣新聞』夕刊 2004 年 12 月 16 日。



ཇམ་ཐོག་སྤྲལ།

図1 チベット仏教の仏画が描く多門天



写真1 内蒙古自治区西部のアルジャイ石窟

四 終わりに

以上、私は主として近年内蒙古自治区で発見された石窟内の壁画の紹介を中心に、

軍神と志士たちが如く北・内モンゴル家の団内におきた。い

参考文献

Ceramus

1998

Chiodo

2000

Collect

Heizig

2000

エリア

2004

石洞窟

2001

松原正

1991

福海天

2004

2004

12月



写真2 アルジャイ石窟31号内の壁画。モンゴル人は写真中央の多門天をチンギス・ハーンだと理解している。

窟石トヤミルでの新西刃部自古蒙内 1真平



写真3 内蒙古自治区西部オルドス市にあるチンギスハーン祭殿



写真4 チンギスハーン祭殿の隣に立つ軍神スウルデ